ガンディー——混迷の時代へのメッセージ

森本達雄

はじめに

本夕は、アジアの思想と歴史・文化を、仏教を中心に古代から現代まで、しかもそれを世界的な視野で広く研究を進めてこられました東洋哲学研究所主催の連続講演にお招きいただき、私の生涯の研究のメインテーマの一つであります近代インドの生んだ偉大な思想家であり、歴史の建設者であった「インド独立の父」、マハートマ・ガンディーについてお話しする機会を与えられましたこと、たいへん光栄に存じます。

私は、これまでもガンディーについては、いくつか小著や講演、テレビやラジオなどでお話してまいりました。そしてそのつど、視点を変えて、新しいガンディー像をご紹介しようとしましたが、結局、考えてみますと、私のガンディー観は終始一貫していたということをあらためて痛感しております。本夕も、新しいガンディー研究の成果の一端というようなものではなく、私が学び、信じてまいりましたガンディー精神の精髄をお伝えしたいと思っております。したがって、初めにお断りしておきますが、お話の根幹は、私がこ

れまで自著に書いたこと、あるいは講演やテレビ、ラジオでお話ししたことと重複しますが、ガンディー思想の核心ということでお許しいただきたいと思います。とくに、ガンディー思想について初めて触れる方も多くいらっしゃるかと思いますので、これだけは、ぜひお話したいと思うことは、あえて拙著からの引用をいとわないことにします。

人間は、どんなにすぐれた人格であっても、しょせんは、歴史のある時代に地上のどこかに生を享け、ある限られた時間と空間のなかでしか生きられません。たとえば、今日世界に大きな思想的影響を与えている仏陀やキリストにしても、仏陀は紀元前五世紀ごろに、北インドで八十年の求道と教導の生涯を送り、また、キリストは三十年余りの短い生涯をガリラヤ湖畔で過ごし、人々を伝道したのでした。このように彼らの行動範囲や生涯の時間は限られたものでした。世界を股にかけ、などということをよく耳にしますが、股にかけたところで、その人が存在するのは、歴史のある時点でのある場所でしかありません。それでいて、人間は同時に、時空を超えた普遍的なものに近づくことができるのです。いわゆる共通のヒューマニティーというものを生きることができるのです。このように、限られた時間・空間のなかに生きながら、それらを超えた人に、私たちはほんとうの人間性の偉大さを見るのです。

マハートマ・ガンディーも、歴史的人格としては、イギリス植民地時代のインド独立の指導者でありました。彼の最大の偉業は、イギリスに対して、インド国民の自立と独立の獲得を指導したことです。しかし、その闘いのなかで、ガンディーが言ったり、行動したことが、インドの独立とはほとんど関係のない今日の世界とわれわれにとって、大きな意味をもつのであり、この、いわゆる時代と国境を超えたガンディーの人間的普遍性を問うことが、今日に生きる私たちのガンディーを学ぶことの重要な意義だと思います。

「わたしの人生そのものが わたしのメッセージ」

ガンディー、本名モーハンダース・カラムチャンド・ガンディーは、一般に「マハートマ・ガンディー」と呼ばれておりますが、「マハー」というのは、「大きな・偉大な」、そして「アートマ」は「魂」という意味です。ですから「マハートマ」というのは「偉大な魂」とか「大きな魂」、あるいは「大聖」ということでして、ガンディーの実名ではなく、国民の崇敬の念を表わした尊称です。

ガンディー自身は、「マハートマ」よりも「ガンディージー（ガンディーさん）」と呼ばれることを好んだそうです。

一九四八年一月にガンディーは暗殺されましたが、このとき彼は、ヒンドゥー教徒と対立するイスラーム教徒の手によって殺されたのではなく、自宗ヒンドゥー教徒の凶弾に斃れたのです。なぜヒンドゥー教徒に殺されなければならなかったのか。それは、今日の世界の宗教問題を象徴するような事件でした。ガンディーの生涯をかけた闘いは、祖国インドの政治的独立だけではなく、ヒンドゥー＝ムスリム（イスラーム教徒）両教徒間の対立や憎しみを取り除くことでした。その場合、インドではヒンドゥー教徒のほうがムスリムより圧倒的に数が多い、ムスリムはいわゆるマイノリティー（少数派）でした。そこでガンディーは、つねに自らの属する多数派のヒンドゥー教徒にたいして忍耐と譲歩を説いたのです。しかし、忍耐と譲歩を説かれたほうのヒンドゥー教徒はおもしろくない。自分たちの最高指導者であるガンディーは、異教徒にばかり配慮して自宗の利益には尽くしてくれないではないか、というような不満をつのらせ、逆恨みをする者もあったのです。

また彼は、人間の平等を説き、ヒンドゥー教の身分制度の排除に、とりわけ最下層の不可触民を「ハリジャン（神の子）」と呼び、その解放と地位の向上に熱心でした。そのために、彼は不可触民のほうが高位の高慢なバラモンたちよりも神に近いなどと言い、保守的なバラモンを怒らせ、ついには暗殺にまでつながったのでした。

ガンディーが暗殺されたとき、英領インド最後の総督となったマウントバッテンが、ガンディーの偉大さをこのように予言しました――「マハートマ・ガンディーは仏陀やイエス・キリストとともに未来の歴史を生きつづけるであろう」と。マウントバッテンほどの見識者が、たんなる思いつきや儀礼的言辞としてこのような讃仰をささげたとは思えません。それはたぶん、彼の実感から出た言葉であったろうと思われます。

といいますのは、一九四七年にインドとパキスタンが分離独立した直後に、ヒンドゥー＝ムスリムの間に、未曾有の、と言ってもいいくらいの憎悪と遺恨の争いが起こりました。マウントバッテンはインド西方の騒擾地パンジャーブに軍隊を率いて鎮圧にあたりました。ところが彼は物のみごとに失敗したのです。これにたいしてガンディーは単独で、数名の弟子たちと通訳を連れて、東方のもう一つの騒擾の地ベンガルに入っていって、紛争を鎮めたのでした。それは奇蹟のような出来事でした。

マウントバッテンはこんなふうに言っています――

「パンジャーブでは、五万五千人の国境警備隊員が暴動によってひとたまりもなく壊滅させられたというのに、たった一人の国境警備隊員――ガンディーのことですね――が、物のみごとにベンガルに平和をもたらした」と。

さて、ガンディーはどのようにしてこの奇蹟を起こしたのでしょうか。まず、非暴力の人ガンディーは、単身、武器も護身具も持たずに争いの渦中に入っていきます。そして、殺し合いをしている村々を訪ね、憎悪で目を真っ赤にしている村人たちの前で手を合わさんばかりに「争いはやめてくれ」と懇願し、殺し合いの愚かさを説きました。初めは行く先々に人糞やイバラがまかれ、橋が破壊されるなど、さまざまな妨害がなされました。そういう村々で、彼は懺悔の旅の証として、素足で一軒一軒をまわり、村人たちに愛と赦しを説いたのです。

この話が村から村へ、人から人へと伝わったとき、「ガンディーが来るぞ、やっつけてやれ！」と言って待ち構えていたヒンドゥーもムスリムも、「ガンディー、キー・ジャーイ（ガンディー万歳）」と言いながら、ガン

ディーを歓迎したといいます。こうした彼の無私の行為が、民衆の心を動かさずにはおかなかったのでしょう。イギリス軍の強大な軍事力ではなく、マハートマの自己犠牲が戦火を消しとめたのです。

ガンディーはよく人から、「ホワット・イズ・ユア・メッセージ（あなたのメッセージは何ですか）？」と訊かれると、ガンディーは「マイ・ライフ」と答えたそうです。「私の人生そのものが、私のメッセージです。私が生きてきた人生の軌道が私のメッセージです」という意味です。したがって私たちは、ガンディーの真の人間像に近づき、思想に触れるためには、彼の言葉と行動を一体のものとして把握し、理解しなければなりません。しかも、言うところの行動と言葉は、歴史的大事件や、あらたまった名演説・講演よりも、むしろ、日常のさりげない行為や、ふともらした言葉に、より多くマハートマらしさを感じとることができるのです。

たとえば、こんな話があります。あるとき一人の若者がガンディーのアーシュラム（修道場）を訪ねました。夕方ガンディーは、彼を誘って散歩に出かけました。幾人かの弟子たちもいっしょでしたが、散歩の帰り道にガンディーも弟子たちも、みんな小石を拾ってはポケットに入れるのです。不思議に思った若者がその理由を訊ねますと、弟子の一人が言うには、「近くアーシュラムに別棟が立つ計画があります。それで小石は、別棟に通じる道に敷くためのペイブメント用に、いまからみんなで拾い集めているのです」。言われてみると、庭の片隅には、小石がうず高く積み上げられていました。この、いかにもガンディーらしい雄大な計画性と、ひと時の時間も、道端の小石一つも無駄にしない慎重な生き方に、若者はすっかり感心したということです。

マハートマはまたこう言っています――「わたしの言っていることは、けっして新しいことではありません。それは山のように古くからあるもので、世界のすぐれた賢者や聖者たちが教えてきたことであり、どの宗教の聖典にも書かれていることです。ただわたしは、自分の時代にそれを生きただけなのです。けっして目新しいことを説いているわけではありません」と。ひとことで言えば、愛と真理、そして非暴力の教えがガンディーのメッセージのすべてだといえましょう。

ガンディーは彼の人格と生涯をとおして、仏陀やイエスが教えたことをあらためて私たちに想起させたというだけで、そこにとりたてて新しいことはなにもないと言っているのです。ただ、彼の教えや行動は、今日の私たちの問題と直接かかわるものであり、現代に生きる私たちに問題解決のヒントを与えてくれるのです。

政治とは国民の愛情に報いること

一九七四年でしたか、私は「ガンディー旅行」と称して、半年間インドを旅し、ガンディーゆかりの地を訪ね、直接ガンディーと親交のあった人たちや独立運動に参加した有名・無名のいろいろな階層の人たちと会い、インタビューをとおして、ガンディーの思い出や個人的印象を聞いてまわったことがあります。そのときの数々のエピソードは、いろいろなところで紹介してまいりました。あれからちょうど三十年になりますから、いまはもう、そのほとんどの人がこの世にはいないと思うと、いっそう懐かしくも、寂しくも感じます。

私のニューデリー滞在中に、ガンディーのお墓のあるラージ・ガートの近くのガンディー研究所に、たまたまガンディーの高弟で哲学者のカーカー・カーレルカールが逗留していると聞き、面会を求めました。私は、ご著書をつうじて、氏をよく知っておりましたので、氏は気持ちよくインタビューに応じ、午前中三日間、ガンディーとの出会いから、いろいろな思い出を聞かせてくれました。とりわけ、詩人タゴールとガンディーの最初の出会いに立ち会ったときの話は感動的でしたが、今夕は、タゴールの話にまで話題をひろげることは残念ながらできませんが、またその機会もあろうかと思います。

当時、氏は九十近い高齢でしたが、年齢を感じさせない若々しさで、いまだに一日十時間以上は読書と執筆活動を続けているということでした。ただ氏は耳が遠いので、質問は紙に書いて見せるようにとの秘書役の女性の言葉でした。私は氏の老眼をも慮って、持参

した便箋に少し大きめの字で質問を書きはじめました。そのとき、私の所作を見守っていたカーカー氏は、大声で私を制して言いました――「いけません、そんな大きな字で書かなくても結構です。私にはこんな便利な道具（拡大鏡を示しながら）がありますから。どんな小さな字でも読めますよ。それに、質問ぐらいに、なにもそんなよい紙を使わなくても、この紙で結構です。（こう言いながら、使用済みの郵便封筒を切り開いたメモ用紙を私に手渡し）インドは貧しい国です。日本のような豊かな国とは違って、この国には、紙一枚買えない子供たちが大勢います。お国に帰ったら、日本の子供たちにそんなインドの子供たちの話をしてやってください。地球の資源は、お互い大切にしましょう、とね。」

私は自分の軽率を深く恥じ入りながら、手渡された紙切れに、小さな字で丁寧に質問を書きこみました。

そのときに伺ったエピソードの一つは、ガンディーの人柄と思想をもっともよく伝えるものとして大変感動深いものでした。この話は、これまでも繰り返しお伝えしましたが、私にとってはガンディーを眼前に髣髴させる逸話として忘れることはできません。

それはある年の国民会議派大会の席上だったそうです。いまにも会議が始まろうとしていたとき、ガンディーが急にソワソワしはじめた。隣にいたカーカー氏がその理由（わけ）を訊ねると、ガンディーは「エンピツを失くしたんだ」と言ったそうです。「ああ、エンピツですか、それならこれをお使いください」と言って、カーカー氏は自分のアタッシュケースから一本のエンピツを取り出して、ガンディーに手渡しました。

するとガンディーは「それではだめだ、わたしのエンピツがほしいのだ、わたしのエンピツでなければいけないんだ」と、語気を強めて言ったそうです。妙なことを言うな、と思いましたが、カーカー氏も一緒になって机の下を探したそうです。すると、三センチほどの小さなエンピツが出てきました。ガンディーはやっと安堵して「よかった、ほんとうによかった」と、うれしそうに席に着きました。

あとで聞いてみると、ガンディーが以前、独立運動のためにインド各地をまわって寄付金を募ったおり、

南インドのある村に立ち寄ったとき、一人の子供が「ガンディーさん、これあげる」と言って、自分の大切な短いエンピツをガンディーにくれたそうです。ガンディーは、この幼い子供の寄付をひじょうによろこびました。大金持ちの人から何百、何千ルピーの寄付金をもらうよりも、貧しい国民の、とりわけ幼い子供の善意に励まされたのです。この一人の子供の自分にたいする愛を無にしてはならないと、ガンディーはカーカー氏に語ったそうです。

政治は愛に立脚していなければならない、というのがガンディーの政治信条でした。愛のない政治は政治とは言えない、と彼は考えていたのです。

私は、カーカー・カーレルカールさんからこの話を聞いて、胸の熱くなる思いでした。ガンディーはつねに、真理と愛、非暴力を彼の人生と政治の理想としましたが、それはけっして抽象的な概念ではなく、一人の子供への愛をとおして実現されたのです。

ガンディーについては、彼がはたしてどんな人物であったか、西洋でも日本でもなかなか実像はとらえられていません。ある人は時代錯誤の理想主義者だといい、またある人は前近代的な宗教指導者だという。また人によっては半裸の行者など、いろいろなことが言われてきましたが、それらはみなマハートマの実像ではありません。そんなことよりも、いま話しましたように、彼の国民にたいする愛の深さ、人間的な真実をまず第一に考えたいと思います。なぜなら、ガンディーは、政治家である前に一個の人間だったからです。

ガンディーの生涯から

ガンディーの七十八年あまりの生涯は、おおよそ三期に分けることができます。まず第一期は、少年時代から青年期にかけての人格の形成期です。

ガンディーが生まれたのは、逆三角形をしたインドの底辺の左端、つまり、現代のパキスタンに隣接するポールバンダルというところです。独立以前のインドは、イギリス政府の直轄支配下にあった英領インド諸州と、その数、五百とも六百ともいわれていた大小さまざまな藩王国とから成り立っていました。とりわけ、

小さな藩王国は、まるでジグソー・パズルのように入りくんでいました。ポールバンダルは、そうした小藩王国の一つでした。これは、いわゆるイギリス支配の鉄則であったディヴァイド・アンド・ルール（分割統治）の法則に従って、インドの統一・結合を阻止しながら全土を支配しようとするものでした。

ガンディーの家は、カーストでは第三階級のヴァイシャでしたが、祖父も父もすぐれた実務能力を買われて、藩王国の宰相をつとめていました。宰相といっても、小国のことですから、高圧的なイギリス人行政官と、気まぐれな藩王、貧しい人民の間に立って、気苦労のみ多い役職だったようで、ガンディーは政治家としてのそうした父の手腕や正義感を見て育ったようです。

少年ガンディーは、はにかみ屋で、学校の成績も中程度かそれ以下だったらしい。私は、ガンディーの通っていた小学校も中学校も訪ねたことがありますが、壁にガンディーの成績表が貼りだされているのを見て、偉くなると大変だなぁと思ったことがあります。ところで、ガンディーの少年時代のお話を始めますと、人間の内面の成長を物語る興味深いエピソードがつぎつぎに伝えられていて、それだけで本日の講演は終わってしまいそうです。幸いガンディーには、そんな少年時代の思い出をつづった『自叙伝』がありますので、機会があったらお読みいただきたいと思います。

イギリス留学、誓いの厳守

ともかくガンディーは、小学校から中学、高等学校、大学へと進学しますが、田舎の高校出の彼は、英語ができなくて町の大学の授業についていけず、郷里に帰ってしまいます。ガンディーがなめた人生最初の挫折でした。この後もガンディーは、いくたびも人生の苦杯を飲み、そのたびに人間的に成長していったようです。家に帰ったガンディーは、お父さんの友人から（このときすでに父は他界しておりましたが）、これからはお父さんのように藩王国の宰相になりたければ、イギリスに留学して、弁護士資格をとるのが最上の道だと、留学を勧められます。ガンディーはその話に飛びついて

留学を熱望します。

残念ながら、留学をめぐる苦労話も割愛しなければなりませんが、ただひとつ、ここで留学にまつわる母との約束の話をさせていただきます。なぜならこれは、いかにもガンディーらしい、そして後年のガンディーを予告するエピソードだからです。母は息子の留学に猛反対をします。留学などしたら、フロックコートを着こんで葉巻をくゆらせる、都会の洋行帰りの弁護士さんみたいにいばりちらす人間になるにちがいない、と母は言いました。ガンディーは兄たちとともになんとか母を説得しようとします。そして母の求めに従い、イギリスでは、酒と、女性と、肉には絶対に手を触れないことを誓い、ようやく渡英を許されます。留学中の費用は、腹違いの兄が引き受けてくれました。

イギリスに行ったガンディーは、母との約束のうち、酒と女性の問題は、生来の生真面目さのおかげで問題はなかったのですが、肉のことではたいへんな苦労をします。ガンディー自身は、当時はまだ菜食主義者でもなんでもありませんでしたが、母との約束を守ることに執心します。ところがイギリスでは、スープにも野菜料理にも肉が入っている。また下宿の家庭料理にしてもレストランの食事にしても、肉や肉気なしの食べ物はまず手に入らない。ガンディーは空腹をかかえて、ふらふらになりながら菜食主義のレストランを探し回りました。彼はそのうえ、母に誓った菜食主義について、つぎのように考えます。

私たち日本人は、インド人は一般的に菜食主義者だと思っているようですが、実際にはその種類といいますが、程度にはさまざまな段階があるようです。いちばん徹底しているのは、葉菜だけしか口にしない人たちです。タマネギだとか、芋だとか、そういう根菜類も食べない厳格な菜食主義者です。理由は、根っこのものを食べようとすると土中の小さな虫を殺すことになるかもしれない、という不殺生の思想のようです。この考えの人は、ジャイナ教徒やバラモン階層に多いと聞きます。

つぎは、根菜をも含めて野菜ならすべてよしとする通常の菜食主義者です。それから卵まではよしとする

立ち上がります。

このようにして、南アフリカでの非暴力の闘いが始まります。闘いを開始するにあたって、ガンディーは考えます――相手は強大な軍事力を有する国家権力である、こちらはなにひとつ武器を持たない市民たちである。暴力に対して暴力をもって立ち向かったのでは戦いにも勝負にもならない。なによりも悪に対抗するのに悪をもってではなく、善をもって立ち向かわなければならない、と。ここで彼は「目的と手段」という独自の哲学を思いつきました。

「正しい目的に達するためには、正しい手段を用いなければならない」というわけです。「目的のためには手段を選ばず」というマキュアベリ的な考えは誤りだとガンディーは考えました。「目的のために手段を選ばず、というのなら、たとえばわたしたちは川を対岸に渡るのに、汽車を用いますか」とガンディーは言いました。

川を対岸に渡るのには、もちろん船を選ばなければならない。バラを咲かせたかったら、毒草の種を蒔いたのではバラは花咲かない。バラを咲かせるのはバラの種です。同様に、正しい勝利を得るためには、正しい手段を用いなければならない。そして、戦いにおける正しい手段とは何か、非暴力である。暴力の種は、より強大な暴力を誘うだけである。それでは、非暴力とは何か。ただ敵の前で暴力を使わず、相手の言いなりになるのは非暴力ではない。恐れをいだかず、むしろ敵にたいして赦しの心をもって、毅然として立ち向かい、相手に暴力の虚しさを気づかせるのが非暴力である。

ガンディーは書いています――「わたしは、ネコがネズミをいたぶって殺すのを見たことがある。ネズミは怖がって逃げようとするが、ネコはすばやくネズミを押さえ、またしばらくじゃれて遊んでは手を離す。こうしてネズミはなんどもネコの手を逃れようとするが、そのたびに捕まる。とうとうネズミはネコの爪によってではなく、恐怖で死んでしまった。それからネコはネズミを平らげてしまうのである。もし世の中のネズミどもが、ネコを恐れず、自分たちのほうから堂々とネコの口に飛びこんでいったらネコは怖くなって、ネズミを見ると逃げ出すかもしれない」と。

一人ひとりは、武器を持たず、物理的な力では弱くても、強い魂と精神をもって相手に改心を迫る、これが非暴力の戦術です。ガンディーの説いた非暴力は、ただ無気力に暴力を用いないという消極的な闘いではなく、精神の力と自己犠牲をもって相手に改心を迫る積極的な闘いです。もちろんガンディーは、自らすすんで自己犠牲を実践したのでした。

こうして、初めは一年間のつもりで南アフリカに渡ったガンディーの人権闘争は、二十年にもおよび、ガンディーは最終的に闘争を勝利に導き、一九一五年に帰国、いよいよ祖国インドの独立運動を開始します。ところが彼は、すぐには政治活動には入らず、一年間をかけて、すし詰めの三等車に乗って国中を見聞してまわり、そこからやおら運動を始めたのです。

生涯最大の闘い「塩の行進」

ところで、いかにもガンディーらしい巧みな比喩で教えられたネコの口に続々と行進するネズミたちの姿を、私たちは有名な「塩の行進」に続く第二回非協力運動に見ることができます。

ガンディーは生涯に三たび、独立運動の大きな闘争を指導しております。すなわち、一九二〇年、三〇年、四〇年と、およそ十年おきに波状的に繰り返された「サティヤーグラハ」と呼ばれる非協力運動がそれです。

これからご覧いただきます「塩の行進」のビデオは、一九三〇年の第二回非協力運動の幕開けで、ガンディーの生涯でも、もっとも記念碑的な闘争として知られております。

このときガンディーは、独立を切望する国民の期待を痛いほど感じながら、いよいよ行動を起こす時期が来たことを直感していました。それでは、何をもって戦いの火蓋を切ればよいか、何を闘争の狼煙(のろし)とすればよいか。そのとき、彼の脳裏に直感的に浮かんだのが、「塩」でした。暑いインドでは、塩はどんな貧しい人にとっても必需品です。その塩にイギリス政府は高い税

金をかけていたのです。

ガンディーはこの「塩」に目をつけました。彼は民衆に向かって呼びかけました――わたしたちの大切な塩はどこで採れるのでしょうか。わたしたちの国の海岸や山中で採れます。その塩にどうしてわたしたちは遠い異国の政府に税金を払わなければならないのでしょうか。それはおかしくはありませんか。塩は大自然の恵みであり、わたしたちの祖先から、母なる大地と海がその子らに恵んでくれた神の恵みです。だからもう、外国人に理不尽な税金を払うのはやめましょう――と。

これはひじょうに筋の通った、文字の読めない大衆にもよくわかる論理です。彼は帝国主義がどうの、搾取がどうのというのではなく、生活の身近な塩をとりあげて、ずばり、イギリス帝国主義の悪の本質をだれにもわかる言葉で明らかにしたのです。

いよいよ戦闘が開始されました。ガンディーは、彼のアーシュラム（修道場）から、七十八人の精選された弟子たちを連れて、ボンベイ近くのダンディー海岸まで、三九〇キロの行進を開始しました。一行のなかには、学者あり、ジャーナリストあり、農民あり、職工あり、不可触民の出身者もいました。年齢も、六十一歳のガンディーから十六歳の少年までさまざまでした。長い竹の杖を手に、隊列の先頭を大股で歩いていくガンディーの雄姿は、実に感動的であったと伝えられています。もしガンディーが、徒歩ではなく汽車を利用して一日で目的地に到着していたなら、あれほどまでに国民の士気を高めることはできなかったでしょう。

沿道には、一目マハートマの姿を「ダルシャン（聖者を拝むこと）」しようと、何百何千という老若男女が毎日毎日一行の通過を待っていました。道々、行進に加わる者も増え、ガンディーたちが目的地に着いたときには、数千人の非暴力の集団に膨れあがっていました。この間「ダンディー行進」のニュースは、インド全土に口づてに伝わり、インド中が息をこらして、ガンディーのつぎの行動を見まもっていました。

イギリス人官僚は、ガンディーの行進の意味がさっぱり理解できませんでした。武器を持たず、ただ弟子

たちと歩いていくだけのガンディーを捕らえるわけにはいかない。一行は二十四日かかって目的地に到着しました。

ダンディー海岸に着いたガンディーは、ヒンドゥー教徒の儀礼にならい、海水で沐浴をして身を浄め、祈りをささげ、海岸に散在する小さな塩のかたまりを拾いました。ガンディーにならって、弟子たちも民衆もみんな塩を拾い集めました。この小さな行為は、あきらかに製塩法の違反であり、さらに言えば、イギリスの法律の無視であり、英帝国そのものを否定する行為でした。そんな簡単な所作を合図に、第二回非協力運動が始まったのです。

非暴力の襲撃

第二回非協力運動のなかで、とりわけ壮絶をきわめた闘争としてインド独立史上語りつがれておりますのは、ダーラサナの製塩所襲撃事件です。襲撃にさいして、ガンディーはイギリス総督に事前通告を送り（ガンディーはいつの闘争でも、相手に不意打ちをくらわせるようなことはしませんでした）、正々堂々と襲撃に挑みました。ラーティと呼ばれる鉄を巻いた棍棒を持って迎えうつイギリスの兵士や警官に向かい、白いドーティ（インド服）にガンディー帽をかぶった国民会議派の志願者たちが、自分は正しきをなしているのだとの確信に満ちた恐れなき心をもって、毅然と頭を上げ、それこそネコの口に向かって嬉々として進軍するネズミのように、つぎつぎに静かに列をなして進んでいく。待ち構えたイギリス兵や警官たちは、ラーティを振りかざして彼らを打ちのめす。血まみれになって一列目が倒れる、すると二列目が前進する。こうしてサティーヤーグラヒ（真理を把んで離さぬ運動の戦士たち）の進軍は二時間にわたっておこなわれ、だれ一人逃げ出す者もなく行進は続いたと伝えられています。

事件を始めから終わりまで目撃し、世界にこのニュースを報道したアメリカ人通信記者ウェヴ・ミラーは――「二十二ヵ国での十八年間にわたる報道生活のなかで、ダーラサナでの事件ほど悲壮な光景を私は見たことがない。その場面があまりにも痛ましく、瞬間的

に目をそむけざるをえなかった。なによりも驚いたのは、志願者たちの訓練された自制心でした。彼らは完全にガンディーの非暴力の信条を鼓吹されていたように思います」と、語っています。

このような自己犠牲をとおして、ついには眠っていた相手の人間的な心を呼び覚まし、良心を目覚めさせようとするのが非暴力の闘争でした。

一九四七年八月十五日、インドは、インドとパキスタン（今日のパキスタンとバングラデシュ）の二国に分かれてイギリスから独立します。ガンディーは最後まで分離独立には反対しましたが、歴史の趨勢には勝てませんでした。戦後、独立を果たしたほとんどの国で、独立の中心的指導者であった人物が、初代大統領や首相に就任したのにたいして、ガンディーは独立と同時に一市民に身を引きます。ニューデリーで催された盛大な独立の祝典の日、ガンディーのために設けられた中央の椅子は空席でした。このときガンディーは、本日のお話の初めにお伝えしましたヒンドゥー＝ムスリムの紛争の地ベンガルで、両教徒の融和のために尽くしていたのでした。

むすび　ガンディーの教え「寛容の精神」

晩年のガンディーはよく、百二十歳まで生きなければならない、と言っていたそうです（百二十歳というのは、最近の医学で人間が生きられる最長年齢とされていますが、どうしてガンディーが百二十歳と言ったのかはおもしろいと思います）。ガンディーはなぜそう言ったのか語っていませんが、とにかく、ただ長生きをしたいと言ったのでないことはたしかです。独立に積み残した二つの仕事――すなわち、一つは不可触民の解放と地位の向上、もう一つはヒンドゥー＝ムスリムの宗教的対立の排除と相互理解であったと、私は想像しています。

ガンディーは宗教的寛容の精神を繰り返し説きました。しかし「寛容（トレランス）」という言葉は、どうも自分が一段高いところに立って、相手を許してやるといういくらか高慢な意味合いが含まれるので、ほんとうは「寛容」という言葉はあまり好きではない、とガンディーは言っています。ガンディーの言う「寛容」

は、自分と相手が同じ高さで向かい合い、相手の心を理解し、尊重することです。

ガンディーははじめ人びとに「神は真理なり」と教えていましたが、あるとき彼は気づきます。「神は真理なり」というと、イスラーム教徒は自分の神は真理である、あるいはキリスト教徒はキリスト教徒で、自分の信じる神こそが真理であって、イスラーム教徒の神はそうではないと考えるかもしれない、と。そこで彼は「神は真理なり」という言葉を「真理は神なり」と言いかえました。真理は一つである。その一つの真理が、風土や歴史や民族性によっていろいろな形の宗教を生んできたのであり、根源は一つの真理である、とガンディーは考えたのです。

今の世界の現状を見ましても、「神は真理である」と言って、世界の諸宗教が互いに対立し、争っています。「真理は神である」ということに世界の諸民族が気づき、互いの神を、自分の神を拝するように尊重したなら、世界は永遠の平和への第一歩を歩みはじめると思います。これが、ガンディーからの混迷する現代世界へのメッセージです。

ご静聴ありがとうございました。

（もりもと　たつお／名城大学名誉教授）

（本稿は、二〇〇五年三月九日に行われた講演内容に加筆いただいたものです）